The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新型コロナウイルス感染症の流行に伴う「自粛警察」についての一考察 ： 言説空間の変容に注目して
Author(s)	松原, 悠
Citation	災害と共生. 2021, 5(1), p. 13-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/84563
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

新型コロナウイルス感染症の流行に伴う「自粛警察」についての一考察
－言説空間の変容に注目して－

"Jishuku-keisatsu (self-restraint police)" under the COVID-19 pandemic in Japan
－ Focusing on transformation of discursive space －

松原悠[1]
Yu MATSUBARA

日本における新型コロナウイルス感染症の流行の拡大に伴い、「自粛警察」という概念が広く使用されるようになった。本稿では、当該概念の使用が拡大した過程を関連するデータに基づいて分析するとともに、似た意味を持つ複数のインターネットスラングのなかから社会状況の変化に応じて「自粛警察」という適切な概念が選び取られて流通したことを示す。そして、この言説空間の変容が、自粛するかどうかの最終判断を個々人に委ねるオフィシャルな自粛要請のもと「自粛警察」的な行為によって自粛を事実上強制するアンオフィシャルな社会規範としての世間の「空気」が生まれつつあったなかで、「自粛の『空気』を作り出すことにつながる行為」を対象化し「空気」を間接的にコントロールする機能を果たした（問題の外在化が実現された）ことを論じる。最後に、本研究から得られた示唆として、災害や危機といった先行きが不透明な状況下においては「空気」の影響力が相対的に強まるなか、そのような事態が発生する事前の段階で、言説空間を豊かにする手がかりを用意しておくことの重要性を述べる。

The Japanese term "jishuku-keisatsu (literally means self-restraint police)" has become a widely used term during the COVID-19 pandemic in Japan to describe overheated actions that attack those who are perceived as not cooperating with measures for controlling the pandemic. We found that this term best describes a social movement that emerged under the pandemic, was promoted by related Internet posting and became quite prominent in Japan. This term contributed to the transformation of discursive space and promoted actions which led to the emergence of strong unofficial implicit social norms called "kuuki" (literally meaning atmosphere) in Japanese in response to the comparatively weak official government requests that people cooperate with guidelines for controlling the pandemic. We can interpret this process as an "externalization of problem" which is a key concept in narrative therapy. We must make efforts to prepare clues for enriching discursive space in disasters and crises which tend to become dominated by "kuuki" in that we consider it important to have a conceptual framework for identifying when society becomes unstable through the analysis of "jishuku-keisatsu".

キーワード: 自粛警察、言説空間、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）、世間の「空気」、問題の外在化
Keywords: "Jishuku-keisatsu (self-restraint police)", discursive space, COVID-19, "kuuki" (atmosphere as implicit social norms), externalization of problem

１．はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行は2020年に世界各国へ大きな社会的影響を与え、本稿執筆時点（2021年5月）においても未だ収束に至っていない。日本においては、感染拡大防止・経済への配慮・オリンピック対応といった課題が絡み合い行政の対応も二転三転するなかで、新型コロナウイルス感染症の流行に翻弄され続ける不安定な状況が続いている。

新型コロナウイルス感染症の流行に関連した社会問題の一つとして耳目を集めたのが、いわゆる「自粛警察」の問題である。「自粛警察」という概念がどのように理解されているかを示す一例としては、「大きな災害発生時や感染症の流行に伴う、行政による外出や営業などの自粛要請に応じない個人や商店に対して、偏った正義感や嫉妬心、不安感から、私的に取り締まりや攻撃を行う一般市民やその行為・風潮を指す俗語・インターネットスラング」（ウィキペディア, 2021）といった説明が存在する(1)。また、「自粛警察」に関する調査としては、その行動

*1 京都大学大学院情報学研究科 大学院生
Graduate Student, Graduate School of Informatics, Kyoto University

に賛成するかを尋ねた質問に対して、回答者の75.3%が「反対」と回答したという調査結果が存在しており（株式会社Wizleap, 2020）多くの人々が「自粛警察」に対して批判的な目を向けていることがわかる(2)。

本稿では、言説空間の変容に注目しながら「自粛警察」についての考察を行う。杉万（2013）によれば、言説とは、まとまりをもった言葉のことであり、言説空間は現場における言葉の世界のことを指す。現場とは、本稿においては基本的に新型コロナウイルス感染症の流行下における日本社会のことと考えて差し支えない。言説空間の変容は現場の実践に大きな影響を及ぼす可能性を有するとされているため、新型コロナウイルス感染症流行下における日本社会の動きを分析するうえで、言説空間の変容に注目することは有用であると考えられる。概念は、言説空間を構成する重要な素材であるとされており、新型コロナウイルス感染症の流行以前には一般に使用されていなかった「自粛警察」という概念が日本社会において広く使用されるようになったことは、言説空間の変容であると考えることができる。本稿では、「自粛警察」という概念の使用が拡大した過程を関連するデータに基づいて明らかにする。そして、この言説空間の変容がもたらした効果について分析・考察し、そこから得られる示唆について論じる。

災害や危機といった状況下における言説空間の変容を扱った研究は多岐にわたる。たとえば、宮本（2016）は、中越地震の被災地である旧川口町（現長岡市）の木沢集落において、集落に無いもの・不足しているものにばかり目を向ける「Xがない」という言明が蔓延していた言説空間が、多くの大学生が集落を訪れるようになったことで、集落に「何がある」のかに目を向ける言説空間に変容し、集落の人たち自らが遊歩道の復旧や廃校になった小学校の活用を進めていったことを指摘している。また、山中（2005）は、阪神淡路大震災後の兵庫と東京の言説空間の変容を比較し、「震災は終わっていない（兵庫）」「まだ震災にこだわっているのか（東京）」という被災地内外の温度差が見られるようになったことを指摘している。本稿のアプローチに近いものとしては、阪神淡路大震災発生後に「活断層」という概念が専門家以外の人々にも広く使われるようになったことを指摘した矢守(2001)の論考が存在する。矢守（2001）は、マスメディアにおける当該概念の使用に注目しているが、本稿においては、阪神淡路大震災発生当時と比較して大きく発展を遂げ社会的影響力を増したインターネット上における「自粛警察」という概念の使用に注目しながら分析を行う。

本稿においては、次節で重点的に分析する2020年2月から4月ごろにかけての日本での自粛現象を、戦前における「空気の検閲（辻田, 2018）」と同じ構図の現象であると見立てている。「空気の検閲」とは、行政の直接的な取り締まりがごく少量であっても、市民自らが「空気」を読んで規範を形成し強固にすることにより、事実上の検閲が高い水準で機能したことを指している。戦前の日本社会では、実際に行われ処分がなされる検閲がごく少量であっても、検閲が行われるのではないかという「空気」が世間に蔓延するだけで人々の表現活動が委縮し、言論統制という政策目標が高い水準で達成されることとなった。新型コロナウイルス感染症の流行下における自粛現象においても、行政機関による自粛要請を背景として増加していった市民の「自粛警察」的な行為が自粛の「空気」を強化し、結果的により多くの人々が自粛を行うこととなったと考えている。なお、戦前と今回との重要な違いは、（戦前には存在しなかった）「自粛警察」という概念が社会で広く使用されるようになったことであると考えている（この重要性については第4節で詳細に論じる）。この理由により、次節以降では「自粛警察」という概念の使用拡大という言説空間の変容を特に重点的に分析することとする。

２．「自粛警察」という概念の使用の拡大過程

本節ではまず、「自粛警察」という概念がいつごろどの程度使用されてきたのかを明らかにする。

この概念は、2019 年以前においてはほとんど使用されていないが、2020 年の 5 月ごろより急速に一般に認知され、広く使用されるようになった。図 1 は、「Google トレンド」における「自粛 AND 警察」をキーワードとする検索の人気度の動向(3)である。2020 年 5 月に大きなピークが存在しており、この時期に非常に多くの人々がこの概念に関心を持ち検索を行った様子がわかる。

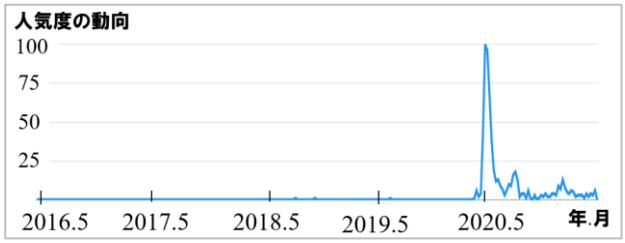

図 1. Google 検索における「自粛 AND 警察」の検索の人気度の動向

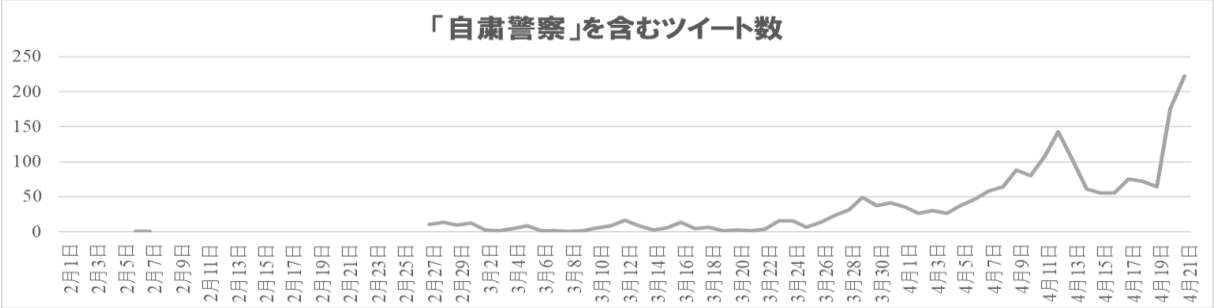

図 2. 2020 年における日別の「自粛警察」を含むツイート数

この概念の使用が拡大した過程をより詳細に分析するため、twitter の検索機能を使用して「自粛警察」というキーワードを含む twitter 上のツイートの数をカウントした。2020 年 2 月 1 日から 2020 年 4 月 20 日までの、「自粛警察」というキーワードを含んだツイート数の推移を図 2 に示す。2020 年 2 月中旬まではほとんど使用されていないが、2 月末ごろよりわずかながら使用されはじめ、3 月や 4 月になるとさらに多く使用されてきていることがわかる。上述した 5 月のピークを迎える以前に、インターネット上で当該概念の使用が少しずつ広がっていたことがわかる[(4)]。

次に、この拡大過程をより詳細に把握するため、2020 年 2 月・3 月・4 月の各日における「自粛警察」を含むツイート数と、新型コロナウイルス感染症関連の出来事とを表 1・表 2・表 3 に整理した。(なお、参考文献については基本的に本文中に記載した。また、本文中で言及していないものは表中に記載した。)

表 1.「自粛警察」を含むツイート数と新型コロナウイルス感染症関連の出来事（2020 年 2 月）

日付	ツイート数	新型コロナウイルス感染症の流行に関連する出来事
1		
2		
3		
4		
5	1	
6	1	
7		
8	1	
9		
10		
11		
12		
13		
14	2	
15		
16		
17		
18		福岡市地下鉄で、せき込んでいるのにマスクをしていないとして、乗客どうしが口論になり、非常通報ボタンが押されてダイヤが乱れるトラブルあり。
19		
20		
21	3	
22		
23		
24		
25		
26	11	（安倍総理メッセージ）多数の方が集まるような全国的なスポーツ、文化イベント等については、大規模な感染リスクがあることを勘案し、今後２週間は、中止、延期又は規模縮小等の対応を要請することといたします。
27	13	全国一斉臨時休校の要請（新型コロナウイルス感染症対策本部にて）
28	10	北海道で道独自の緊急事態宣言（週末の外出を控えるようお願いする内容）
29	12	

まず、2020 年 2 月（表 1）について述べる。2 月 18 日には、福岡市地下鉄で起きたマスク着用をめぐるトラブルが報じられており（西日本新聞ニュース, 2020）、既に新型コロナウイルス感染症の流行やマスクの着用に関する関心が高まっている様子が見受けられる。2 月 26 日には、「多数の方が集まるような全国的なスポーツ、文化イベント等については、大規模な感染リスクがあることを勘案し、今後 2 週間は、中止、延期又は規模縮小等の対応を要請することといたします」と政府が発表（厚生労働省, 2020）し、翌 27 日には政府の新型コロナウイルス感染症対策本部において小学校・中学校・高等学校及び特別支援学校等における一斉臨時休業の要請がなされた（新型コロナウイルス感染症対策本部, 2020a）。そして、28 日には、北海道で道独自の緊急事態宣言（この週末は外出を控えていただくようお願い）がなされた（北海道, 2020）。

行政機関によるオフィシャルな自粛要請が初めてなされたのがこの 2 月末という時期である。2 月 25 日以前は「自粛警察」を含むツイートが存在しない日が多いが、2 月 26 日以降は連日「自粛警察」を含むツイートが存在している。もっとも、一日あたりのツイート数は 10 件程度であり、ごく少数にとどまっている。

なお、この時期に、有名人がスキーに行った写真を SNS にアップロード（アップロード日は 2 月 25 日）したことに対して批判が集まったことが報道されていたり（日刊サイゾー, 2020）、著名なアーティストがライブを決行（2 月 29 日・3 月 1 日）したことへの批判が報道されていたり（アサ芸プラス, 2020）といった、自粛しないことに対する批判を行う動きが出現している。なお、前者は行政からの自粛要請が何ら出ていない段階の出来事であり「不謹慎」の問題として批判されていると考えることができる。（「不謹慎」の問題については主に次節で言及する。）

表 2.　「自粛警察」を含むツイート数と新型コロナウイルス感染症関連の出来事（2020 年 3 月）

日付	ツイート数	新型コロナウイルス感染症の流行に関連する出来事
1	3	
2	2	
3	5	
4	9	著名なアーティストがライブを中止
5	2	外務大臣が2月29日にゴルフに行っていたとの報道（週刊文春, 2020）
6	2	
7	1	
8	2	
9	6	宝塚歌劇が再開。翌日に、賛否分かれるとの報道（スポーツ報知, 2020）（3月12日から再度中止）
10	9	大型イベントの自粛について今後10日間程度の継続を要請（新型コロナウイルス感染症対策本部にて）
11	16	
12	9	
13	3	
14	6	
15	13	
16	5	
17	7	
18	2	
19	3	大阪府と兵庫県の間の不要不急の往来自粛の呼びかけ
20	2	
21	4	
22	15	埼玉県で有観客でのK1イベント決行（K-1実行委員会, 2020）（3月28日開催分は無観客に（東京都, 2020a））
23	15	
24	7	
25	13	東京都知事の週末外出自粛要請
26	23	
27	31	阪神タイガースの選手らが感染（感染に伴う嗅覚・味覚異常が知られる）（阪神タイガース, 2020）
28	49	
29	37	志村けんさんが新型コロナウイルス感染症に伴う肺炎で死去（日本経済新聞電子版, 2020a）
30	41	東京都知事が平日夜間の外出自粛を要請
31	35	

3月に入ってからは1日10件前後のツイートがみられる状況が続く。3月4日には上述した著名なアーティストが、続くライブの5公演を中止としている（産経ニュース, 2020a）。これに対して「自粛警察が成果を出したのか。」とみなしているツイート(5)がみられる。インターネットのごく一部では、この時期に既に自粛警察が活動を行い、成果をも出しているとみなされていることがわかる。

3月10日には大型イベントの自粛について今後10日間程度の継続が要請され（新型コロナウイルス感染症対策本部, 2020b）、19日には知事による大阪府と兵庫県の間の不要不急の往来自粛の呼びかけ（NHK, 2020a）といった動きがあったが、これらはツイート数の増加につながっていない。次のツイート数増加のタイミングは3月の下旬ごろである。3月25日に東京都知事による週末の「お急ぎでない外出は是非とも控えていただくようにお願い」（東京都, 2020a）や、30日の東京都知事による「平日の夜間の外出、そしてこの週末もご協力いただきましたが、週末の不要不急の外出をお控えいただきますようにお願い」（東京都, 2020b）を受けて、1日40件前後まで増加している。2月末と比較して1日のツイート数が4倍程度に増加してはいるものの、まだ「自粛警察」という概念が一般に広く使われる状況には至っていない。

表 3.「自粛警察」を含むツイート数と新型コロナウイルス感染症関連の出来事（2020 年 4 月）

日付	ツイート数	新型コロナウイルス感染症の流行に関連する出来事
1	26	
2	30	
3	26	
4	37	
5	46	
6	58	東京都、巡回で“外出自粛”直接呼びかけへ、必要に応じて警察への協力要請も（TBSニュース, 2020a）
7	64	布製マスク全戸配布決定（内閣府, 2020） 集団感染が確認された京産大に数百件の脅迫電話との報道（産経ニュース, 2020b）
8	88	7都府県を対象とした緊急事態宣言　店を休めという匿名の電話　都内の110番通報「宣言が出たのにパチンコ店が開いている」「公園で子どもたちがサッカーをしている」
9	80	「緊急事態宣言出ているのに営業」腹立てドア破壊したとして男逮捕 神奈川県 県警が外出自粛の周知に協力（NHK, 2020b）
10	108	警視庁が繁華街で外出自粛の呼びかけ（NHK, 2020c）
11	143	
12	103	
13	61	
14	55	
15	55	
16	75	緊急事態宣言を全国に拡大 一律10万円の現金給付で補正予算組み替えへ（新型コロナウイルス感染症対策本部, 2020d）
17	72	駐車場で県外車監視　遊技施設など約３０店　和歌山市
18	64	
19	176	鎌倉市の道路で渋滞
20	222	（「自粛警察というワードがあるのか。」とか、「上手い言い回し！！」といったツイートあり。）
21	多数（数百以上）	
22	〃	「来県お断り」徳島県 県職員が双眼鏡で県外ナンバーをチェック
23	〃	東京都で25日からStay Home週間
24	〃	岡山県で関西などから来た県外ナンバーの運転手らに任意で検温する計画を表明 徳島県で県外ナンバーの人に対する誹謗中傷・暴言・石を投げる・あおり運転がみられるとの発表
25	〃	大阪府で休業要請に応じないパチンコ店の名前の公表（日本経済新聞電子版, 2020b）
26	〃	飲食店への「安全のために、緊急事態宣言が終わるまでにライブハウスを自粛してください。次発見すれば、警察を呼びます。近所の人」との張り紙（東京新聞, 2020）
27	〃	
28	〃	駄菓子店への〈コドモアツメルナ　オミセシメロ　マスクノムダ〉という貼り紙（NHK, 2020e）
29	〃	
30	〃	

4 月に入ると、ツイート数の増加が本格化する。特に、4 月 8 日からの「7 都府県を対象とした緊急事態宣言」（新型コロナウイルス感染症対策本部, 2020c）を境とした増加がみられる。このころより、「店を休めという匿名の電話」（2020 年 4 月 8 日のツイート(6)）「『緊急事態宣言出ているのに営業』腹立てドア破壊したとして男逮捕」（ライブドアニュース, 2020）「都内の 110 番通報『宣言が出たのにパチンコ店が開いている』『公園で子どもたちがサッカーをしている』」（TBS ニュース, 2020b）といった後に「自粛警察」的な行為として呼称されるようになる出来事の報道が多数なされている。これらの行為は、自粛を行わないことによって「自粛警察」の攻撃の対象になるのではないかという恐れを抱かせるものであり、自粛の「空気」を作り出し前節で言及した「空気の検閲」の構図を強めるものである。

4 月 16 日には緊急事態宣言の対象が全国に拡大され（新型コロナウイルス感染症対策本部, 2020d）、不要不急の外出自粛要請が全国化する。4 月 19 日には

観光地の「鎌倉市の道路で渋滞」といった報道がみられるほか（NHK, 2020d）、行政も「駐車場で県外車監視　遊技施設など約３０店　和歌山市」（朝日新聞, 2020a）「『来県お断り』徳島県 双眼鏡で県外ナンバーをチェック」（朝日新聞デジタル, 2020a）といった動きを行っており、外出や県境をまたぐ移動に対する関心が高まっている。そしてこの時期に twitter では、これまで「自粛警察」という概念を使っていなかった人が、この概念を新たに知って使い始めている様子がみられる。たとえば、「自粛警察というワードがあるのか。」(7)、「上手い言い回し！！」(8)といった言及を行っているツイートが存在する。（なお、これ以前のツイートにおいては、「自粛警察」という概念の意味が特に説明されることなく、「自粛警察が出現するのではないか」といった形で用いられていた。すなわち、新たにこの概念を知ったというよりは、「自粛警察」という概念が既に知られているものとして、もしくは説明なしに理解されうるものとして用いられていた。）

4 月 21 日以降は、ツイート数の手集計（総数を 1 つ 1 つカウントしていくこと）が困難になる数百件程度の多数のツイートが存在する。外出自粛についても、ゴールデンウィークを「STAY HOME 週間」とするという東京都知事の会見（東京都, 2020c）や、岡山県知事が新型コロナウイルス対策として、関西などから来た県外ナンバーの運転手らに任意で検温する計画を表明（岡山県, 2020a）（なお、計画は批判を受け 28 日に中止を表明（岡山県, 2020b））といった様々な形で行政が自粛を訴える動きがみられる。そして、「行政からの休業要請に応じているにもかかわらず、一部の飲食店に匿名の張り紙などで休業を求める行為が相次いでいる」（東京新聞, 2020）といった状況や、居住する都道府県以外のナンバープレートの車の人に対する嫌がらせ（県外ナンバー狩り）がみられはじめ（徳島県, 2020）、全国の至るところで「自粛警察」的な行為がみられるようになった。

4 月下旬以降には、「自粛警察」という概念がマスメディアでも使用されるようになった。たとえば、「転機になったのは 4 月 28 日、朝のワイドショーがこれを取り上げ、著名人が相次ぎ『自粛警察がトレンド入りしているけれど良くない』とツイートしたことで、ゴールデンウィーク入りした 29 日には検索回数が 7000 件以上となり、その後も高水準で推移している。」（藤, 2020）という指摘が存在する。5 月に入ってからは、新聞記事上でも当該概念が使われ始めている（表 4 参照）。

表 4.　朝日新聞の朝夕刊における「自粛警察」という語句を含む記事数

日付	件数
2020年4月	0
2020年5月	12
2020年6月	18
2020年7月	16
2020年8月	9
2020年9月	5
2020年10月	8
2020年11月	8
2020年12月	5
2021年1月	10
2021年2月	7
2021年3月	1

そして、5 月 9 日には Wikipedia 上に「自粛警察」の記事が作成された（ウィキペディア, 2020）。さらに、本節冒頭で紹介した Google 検索の状況（図 1）からもわかるように、当該概念は 5 月以降急速に関心を集め、広く知られて使用されるようになった。「自粛警察」という概念が広く知られたという証拠の一つとして、2020 年 11 月 30 日に発表された「今年の新語 2020」の第二位には「〇〇警察」がランクインしている（三省堂, 2020）。

本節の分析からわかることとしては、まず、「自粛警察」を含むツイート数の増加が行政の動きと密接に関連しているということである。特に、2 月末のイベント自粛と学校臨時休業の要請、3 月下旬の東京都による週末や平日夜間の外出自粛要請、4 月 8 日と 16 日の緊急事態宣言を境として、ツイート数の増加がみられる。したがって、「自粛警察」という概念は、市民自らが自発的に実施した「自粛」を背景としているというよりは、公権力（いわば「警察」側）の動きが加わって初めて使用が拡大してきたものであると言えよう。

一方で、行政が自粛要請を出す前の段階においても、2 月の福岡市地下鉄におけるマスク着用をめぐるトラブルや、スキーに行った写真を SNS にアップロードしたことへの批判など、新型コロナウイルス感染症の流行が徐々に拡大するなかで他者の行動にセンシティブになっている社会状況が背景として存在している様子がうかがえる。また、後に「自粛警察」と呼称されることになるような行為は、当該概念の使用が普及する少し前の 4 月上旬の時点で顕著に出現（店を休めという匿名の電話や営業中の店のドアの破壊）している。この時点では、多くの人がそれらの行為を「自粛警察」であるとは措定していないが、後にそのように称されるような行為自体は既に存在していたことがみてとれる。「自粛警察」と

して理解されるようになる以前にそれに該当するような行為が随所でなされ報道されることにより、多くの人々が「自粛警察」を「上手い言い回し！」と認識しうるような社会状況が、「自粛警察」という概念の普及に先立って存在していたと考えられる。

以上のように、自粛要請に関する行政の動きや、後に「自粛警察」と呼称されるような行為が先立って存在しているなかで、「自粛警察」という概念は広く使用されていくこととなった。

３．「自粛警察」という概念誕生の背景

2020 年 2 月末に行政から自粛要請が出される以前にも、「自粛警察」という概念は、数は多くないながらもインターネット上で使用されてきた。本節では、前節と比べてより長期的な視点から「自粛警察」という概念誕生の背景を分析したい。

「自粛警察」と関連する概念としては、「〇〇警察」という概念が 2010 年代に入ってから出現していたという指摘が多数存在する（e.g., ねとらぼ, 2018; 三省堂, 2020）。「〇〇警察」の〇〇には多様な言葉が入り、たとえば「日本語警察」であれば、正しくない（往々にして微細な）日本語表現の誤りに対して指摘を行う行為を指す。何らかの「正しさ（正しいとされていること）」がある程度オフィシャルに成立している際に、それを背景として指摘を行っていることが特徴的である。また、「〇〇警察」は、正義を後ろ盾にして誤りを指摘することを好む人という、このような行為を行う人物を揶揄する意味でも使用されてきた。前節では、「自粛警察」という概念が、2020 年 4 月半ば以前にはその意味内容についての特段の説明を要することなく通用する概念として使用されていたことを述べた。その理由は、この「〇〇警察」の〇〇に自粛を入れた形での造語として「自粛警察」という概念が生まれたためであったと考えられる。すなわち、「〇〇警察」という概念が先行して存在していたために、「〇〇」に「自粛」を入れた語句の意味が自明のものとして理解されたと考えられる。

2019年のツイートを調査したところ、「自粛警察」とよく似た意味で使用されてきた「〇〇警察」として、「不謹慎警察」というインターネットスラングが見受けられた（表5参照）。2019年に「不謹慎警察」が含まれるツイートは約900件存在し、「自粛警察」よりも格段に多く使われている。また、「不謹慎警察」を含むツイート数は、主に災害や事件と関連して増減している様子がみてとれる。

表 5.　「自粛警察」「不謹慎警察」を含む各月のツイート数と内容に関連する出来事

日付	ツイート数		ツイート内容に関連する出来事
	自粛警察	不謹慎警察	
2019年1月	1	45	
2019年2月	1	62	ダムカレー（ダムを模したカレー、崩して食べるので不謹慎？？）
2019年3月	2	121	東日本8年、TVでの「不謹慎警察」特集、音楽家の逮捕に伴う楽曲の出荷・配信・放送等自粛
2019年4月	2	61	
2019年5月	1	53	
2019年6月	4	71	山形県沖地震(6月18日)
2019年7月	0	123	京都アニメーション放火殺人事件（7月18日）
2019年8月	1	59	（原爆投下日、終戦記念日）
2019年9月	7	83	令和元年房総半島台風（台風15号）
2019年10月	8	157	台風（台風19号、令和元年東日本台風）
2019年11月	2	34	
2019年12月	0	28	
2020年1月	0	46	中国・武漢における新型コロナウイルス感染症の流行

「不謹慎」に関する社会的関心が大きく高まったのは、2011 年の東日本大震災のときであり、「Google トレンド」における「不謹慎」の検索の人気度（図3）にもそれがあらわれている。東日本大震災の発生後には、被災地以外において地震発生以前に実施していたことを通常通り実施することに対して、「不謹慎」という指摘がインターネット上を中心に多数なされた（たとえば、三浦・鳥海・小森・松村・平石, 2016）ことが知られており、検索数の増加もそれに由来するものと考えられる。

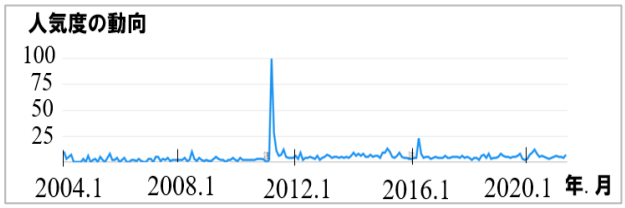

図 3.　Google 検索における「不謹慎」の検索の人気度の動向

なお、「〇〇警察」はここ 10 年ほどで使用例が増えた（三省堂, 2020）ものであるため、東日本大震災の時点で多く使用されていたのは、「不謹慎警察」ではなく「不謹慎厨」という概念である。「厨」は中毒者を意味するインターネットスラングであり、不謹慎さを指摘することに快感を覚える中毒者として、そのような行為を揶揄・批判する意味合いで用いられている。新型コロナウイルス感染症の流行拡大に際しても、「自粛警察」が出現する以前に、「不謹慎厨」の小さなピークが「Google トレンド」における検索の人気度においてあらわれている（図 4）。そしてその後、「不謹慎厨」の検索数は減少し、「自粛警察」の検索数が急増することとなったことがわかる。

図 4. Google 検索における「不謹慎厨」と「自粛 AND 警察」の検索の人気度の動向

新型コロナウイルス感染症の流行下においては、「不謹慎厨」や「不謹慎警察」ではなく「自粛警察」という概念が広く使用されたのはなぜであろうか。

1 点目の理由として考えられることは、不謹慎かどうかがもはや主要な論点とならなかったことである。過去の震災時等に論点となった不謹慎については、その行為が不謹慎に該当するかどうかは現代の日本社会では政府が決定するものではなく、アンオフィシャルな（公的な裏付けのない）社会規範のなかで人々が判断するものとなっている。一方、自粛要請は行政機関からの公式の要請であり、オフィシャルな社会規範のもとで自粛するかどうかの決定が求められるものである。すなわち、不謹慎が問題になる状況下においては、不謹慎かどうかという点が自粛すべきかどうかという点に連動しているのに対し、新型コロナウイルス感染症の流行下においては、不謹慎かどうかという点が自粛すべきかどうかに連動しておらず、自粛は基本的に「すべきもの」であることがオフィシャルに公言されることとなった。したがって、「不謹慎かどうか」はもはや主たる問題ではなくなり、（基本的にはすべきものである）「自粛をするかどうか」へと焦点が移行し、自粛という行為そのものを対象として扱う「自粛警察」という概念がより合致する状況であったと考えられる。

2 点目の理由としては、これは 1 点目とも関連するものの、自粛を求めることがもはや中毒者（厨）の行為ではなく、警察的な行為となったことが挙げられる。自粛が、基本的に「すべきもの」であることが公的機関によって公言されたことにより、自粛を求める行為はもはや社会のなかで異質で特異な存在とされる「中毒者（厨）」の行為ではなく、オフィシャルな社会規範からの逸脱を取り締まることが役割である「警察」的な行為に変化した。この状況の変化によって、「〇〇厨」ではなく「〇〇警察」という概念がより状況に合致するものとして選び取られたと考えられる。（なお、付言すれば、中毒者の行為であれ、［一般市民の］「警察」による行為であれ、これらの行為は自粛の「空気」を作り出すことを通じて自粛を事実上強制する作用を持つ。行政機関の関与しない「不謹慎」の問題においても「不謹慎警察」という概念が誕生したのは、人々に自粛を事実上強制する権力性が存在するためではないかと筆者は考えている。）

ここで、再度図 4 を参照すると、新型コロナウイルス感染症の流行のごく初期において「不謹慎厨」の小さなピークがみられることから、「自粛警察」的な行為は当初「不謹慎厨」による行為と理解されようとしていた可能性がある。しかしながら新型コロナウイルス感染症の流行下の社会状況により合致するのは「自粛警察」という概念であるため、その後、前節で詳細に分析したような過程を経て「自粛警察」という概念が広く使用されるようになったものであると考えている。（「不謹慎厨」「不謹慎警察」「自粛警察」の違いを表 6 にまとめた。）

表 6. 「不謹慎厨」「不謹慎警察」「自粛警察」の違い

	使用拡大の時期	行政機関の関与	事実上の自粛強制力
不謹慎厨	東日本大震災時	なし	あり
不謹慎警察	ここ数年（「〇〇警察」という語用の拡大に随伴）	なし	あり
自粛警察	2020 年 4 月ごろ	あり（間接的）	あり

なお、「自粛警察」という概念が広く使用されるようになったのは今回の新型コロナウイルス感染症の流行下が初めてであるものの、「自粛警察」的な行為そのものは戦前より存在している。「自粛警察」から「自警団」や戦時中のことを思い浮かべる人も多かった（たとえば、朝日新聞, 2020b）ことからもわかるように、市民が自粛の「空気」を作っていくという動きは、既に述べているように戦時中の「空気の検閲」と同じ構図を持っている。検閲以外の分野においても「自粛警察」的な行為は存在していた。たとえば、戦時中には「ぜいたくは敵だ」として、パーマをやめましょう（自粛しましょう）という「呼びかけ」が政府からなされ、禁止はされていないにもかかわらずその「呼びかけ」を背景として、髪型をパーマにしている人が様々な嫌がらせを受けた（朝日新聞デジタル, 2020b）という事例も存在する。

今回の新型コロナウイルス感染症の流行下においては、「自粛警察」という概念が一般に普及する直前の 4 月上旬に本物の警察と連携した自粛呼びかけの動きが出ていた（表 3 参照）。4 月 6 日の「東京都、巡回で“外出自粛”直接呼びかけへ、必要に応じて警視庁への協力要請も」や 4 月 9 日の「神奈川県 県警が外出自粛の周知に協力」、4 月 10 日の「警視庁が繁華街で外出自粛の呼びかけ」がその例である。ところが、この時期以降には警察自体の活動はあまり多く報道されていない。ここには、本物の警察（市民に自粛を求める警察）が、市民による「自粛警察」に置き換わっていく様子があらわれているのではないだろうか。警察によって強制される自粛ではなく、「自粛警察」という市民による規範形成の動き（営業中店舗への嫌がらせや、県外ナンバーの車への嫌がらせ等）が増加し、市民自らによる「自粛」が強まった。まさに戦前における「空気の検閲」と同様の構図がみてとれる。むしろ、社会規範に違反したものへの処分に行政当局が直接的には全く関与せず、市民による「自粛警察」によって処分が行われたという点において、より行政の直接的な関与が少なくなり、「空気の検閲」の構図がさらに強まったとも言えよう。

一方、戦前との違いとしては、今回は「自粛警察」という概念が広く使用されることになったという点が存在する（この重要性については次節で述べる）。前節と本節の分析からわかるように、「自粛警察」という概念が「自粛警察」的な行為の発生から比較的早期に広まったことの背景にはインターネットの存在が大きく影響している。インターネット上で用いられてきた「不謹慎厨」や「不謹慎警察」といったインターネットスラングが「自粛警察」という概念誕生の背景には存在し、その使用拡大の過程においてもインターネットが大きな役割を果たした。インターネット上では、多くの人々に良いと思われた表現が一気に広がり、twitter でのトレンド入りを果たし、それがマスコミで報道されてさらに多くの人々に知られるといった動きが日常的に生起している。インターネットは様々な社会問題を引き起こすこともあるものの、世の中の状況が変化しそれをあらわす適切な表現が求められている際に集合知的に「言い得て妙」な表現を産出し、それを広く流通させることにおいて大きな役割を果たしつつある。

４．「自粛警察」という概念の使用拡大による効果とそこから得られる示唆

「自粛警察」という概念が 2020 年 4 月～5 月のタイミングで一気に広まった後に、「自粛警察」的な行為は小康状態となった。そして、2021 年 1 月には、「『自粛警察』なぜ消えた？」といった記事（時事ドットコム, 2021）が出るなど「自粛警察」が一旦過去のこととして扱われている。その後、たとえば 2021 年 4 月 1 日から 21 日までとして東京都が設定した「リバウンド防止期間」においては、都民向けに「日中も含めた不要不急の外出自粛」の要請が出されている（東京都, 2021）なか、繁華街で飲み歩いている人々の様子が報じられている（朝日新聞, 2021）ものの、これらの人々に対する表立った攻撃（「自粛警察」的な行為）は報じられていない。さらに、3 回目の緊急事態宣言が出た 2021 年 4 月 25 日の翌日には、（「自粛警察」に代わって）本物の警察を含む行政職員たちが見回りを行っている（京都新聞, 2021）。

以上の社会状況の変化には、「自粛警察」という概念の使用が拡大したことが関係していると筆者は考えている。考察を進めるにあたり、自粛に関する社会規範と関連する概念として、あらためて世間の「空気」という概念に着目したい。大澤（2018）は、社会規範の一形態としての「空気」の性質として、第 1 に関係者のあいだでシェアされる、第 2 に普遍性がない、第 3 に一枚岩である（異論や反論は共存しえない）、第 4 に個人の判断から独立している、第 5 に明示されない、という 5 つの性質を挙げている。新型コロナウイルス感染症の流行に伴うオフィシャルな自粛要請は、「禁止」ではなく「自粛要請」という形でなされており、最終的に自粛を行うかどうかの判断基準は明示されておらずそれぞれの人に判断がゆだねれられた形となっている。一方で、「自粛警察」は「自粛」を行っていないとみなした行為に対して（そうみなした者が私的に）懲罰を与える行為であり事実上の「禁止」というアンオフィシャルな社会規範を形成するものである[9]。すなわち、禁止が明示されないなかで、自粛を事実上強制する「空気」が日本社会で生まれていたと考えることができる。2020 年の 4 月上旬にみられたような「自粛警察」という概念の流通以前の「自粛警察」的な行為は、「空気の検閲」の構図を通じて「空気」による支配を生み出すものである。

「一枚岩である（異論や反論は共存しえない）」「明示されない」といった性質を持つ「空気」による支配は、それに反する者が「抗空気罪（山本, 1983）」として処罰されてしまうという厄介な性質を有する。そうであるが故に、「自粛すべき」という社会規範に

沿った行為である「自粛警察」的な行為を、適切な概念なしに表立って批判するのは困難を伴う。また、「自粛警察」の資質自体は非常に多くの人が有するものであると筆者は考えている。たとえば、「自粛警察」に関する文脈のなかで論じられた記事のなかで、「あれこれと眉をひそめる言動が伝えられるなか、人間の性を嘆きつつ街へ出れば、ノーマスクや鼻出しマスクに心を尖らせる自分がいた。まさに、人間とは自分のごとき者なり。『自粛警察』はともかく『マスク風紀委員』くらいの資質はあるという気づきは、内なる全体主義への指向を感じさせて苦い味がした。」（福島, 2021）といった記述がみられる。また、「彼らは決して『異質な存在』ではない。むしろ、人ごとではないと考えるべきだ」「彼らの処罰感情を理解できるという人も決して少なくないだろう」といった指摘（ハフポスト, 2021）もみられる。さらに、新型コロナウイルス感染症の人々への心理的影響を調査した元吉（2021）によると、1200 名を対象として「規範逸脱者への嫌悪感」の有無を尋ねた結果、平均値が「ややあてはまる」と「どちらともいえない」の間となったことが報告されており、少なからぬ人々が規範逸脱者への嫌悪感を有していたことが示されている。「自粛警察」的な行為が決して他人事ではなく、程度の差こそあれ誰もがその資質を有するのであれば、表立って「自粛警察」的な行為（≒程度の差こそあれ、自分自身も共感すること）を批判するのは困難であろう。ましてや「自粛警察」という概念が普及していない状態であれば、「程度の差こそあれ、自分自身も共感すること」である行為から、「空気」による支配を作りかねないという性質のみを特定し批判の対象とすることはなおのこと困難となる。いわば、「自粛警察」は新型コロナウイルス感染症の流行下において、人々のうちに内在していたものと言えよう[10]。

以上の状況に対して、4 月下旬以降においては、同種の行為に対してこれまで用いられていなかった「自粛警察」という概念が広く用いられるようになった。そして、「自粛警察」という概念が流通したことによって、そのような行為が「自粛警察」として報じられ言及されるようになり、「自粛警察」に対する疑念や嫌悪が表明されることにもつながった。「自粛警察」という概念が普及したことは、「自粛警察」的な行為を実施しようとした人においても、牽制力になったのではないかと思われる。少なくとも、この概念が普及したことによって自分の行為が「自粛警察」ではないかと顧みることは可能になる。たとえば、「自粛警察」的な行為を行ったとされる人に対して取材を行った NHK の記事（NHK, 2020f）においては、取材対象者が、「『自粛警察』と呼ばれるような行為をしたつもりはない」「『自粛警察』と呼ばれる行為に全面的に賛成はできないが」いった形でこの概念を用いて思考を行っている様子がみてとれる。

この効果は、「問題の外在化」という概念で解釈することが可能である。「問題の外在化」とは、心理療法の一つであるナラティブセラピーにおいて用いられる鍵概念で、困難を抱えている患者の問題を、患者自身に内在する問題とするのではなく、その問題に呼称を与え、患者から外在するものとして再構築することでその問題への対処を図っていくことを指す（Gergen, 1999 東村訳 2004）。先に、「自粛警察」は新型コロナウイルス感染症の流行下において、人々のうちに内在していたものであったと述べた。「自粛警察」という概念の使用が拡大する以前は、外在化ができておらず「自粛警察」的な行為への対処が困難な状態であったが、「自粛警察」という概念が使用されるようになってからは、それだけを問題として切り出して外在化することが可能となった。「自粛警察」という概念の使用拡大という言説空間の変容があったからこそ、「自粛警察」的な行為が減少するという社会問題の緩和につながったものと考えることができる。すなわち、「自粛警察」という概念は、「事実上の禁止という『空気』を作り出しかねない市民の行為」を外在化させ、その是非を議論する（異論や反論を生み出す）ことを通じて、間接的に「空気」をコントロール可能にしていくという点で重要な役割を果たしたと考えられる[11][12]。

なお、「自粛警察」的な行為の減少は、市民による行為を通じて自粛を徹底させること（「空気の検閲」の構図）の弱まりにつながる。本節の冒頭では、2021 年の 4 月には自粛要請が出ているにも関わらず繁華街で飲み歩く人が見られるなど、自粛の「空気」にゆるみが見られることを述べた。仮に 2020 年の 4 月や 5 月に同じことが起きれば、市民による「自粛警察」的な行為が出現し、自粛の「空気」を強化したものと思われるが、そうはなっていないという点からも、「自粛警察」的な行為に対する社会的コントロールが効いている状態になったと言えるのではないだろうか。そして、2021 年 4 月に警察の巡回が再度行われるようになった（京都新聞, 2021）という動きについては、「自粛警察」的な行為が減少し「空気の検閲」の構図が弱まったため、「自粛警察」に代わって行政の直接的な活動を増加させることによって自

粛の「空気」を作っていく必要が生じたことによるものであると解釈できる。

本稿におけるこれまでの議論を通じて、適切な概念の存在が人々の行為や社会規範へ大きな影響を与えることが明らかになった。最後に、ここまでの一連の分析から得られる示唆について述べる。それは、「空気」による支配に陥りかねない状況下でも言説空間を豊かにできうる手がかりを予め準備しておく重要性についてである。

社会のなかのさまざまな問題には（学校の試験のようには）正解がないのが普通であり、「他の人がどう考えているか」が有力な判断基準になることが指摘されている（吉田, 2001）。「他の人がどう考えているか」が判断基準になるからこそ、会議などを開いて意思決定を行っているとされる。大規模な災害や危機といった、多くの人が初めて体験し、先行きが不透明な状況下においては、平常時にも増して「正解」がはっきりしないため、「他の人がどう考えているか」がより有力な判断基準になってしまう。すなわち、そこにいる人々が作り出す「空気」による支配に陥ることが懸念される。「空気」による支配は、十分な議論がなされないままに事実上の強固な社会規範が成立してしまい、しかも一旦成立した後にはそれに反することが困難になってしまうという厄介な性質を持っている。また、行動の意思決定の責任の所在が不明確になってしまうという問題も生じてしまう。

「自粛警察」の事例においては、インターネットの存在が「空気」による支配に抗する手がかりとなる適切な概念（「自粛警察」という概念）の産出に大きく寄与した。そして、この概念が新型コロナウイルス感染症の流行下における言説空間を豊かにすることの一助になった。しかしながら、インターネットがどのような状況の変化に対しても適切な概念を提供するとは限らない。したがって、災害や危機のなかでも、少なくとも将来も発生することが予想されている地震や洪水等の災害については、「空気」による支配に陥りかねない状況において言説空間を豊かにする手がかりを準備しておくことが望ましいと考えられる。

たとえば、宮本（2019, 2020）の論じている、近年の災害において被災地でしばしば見られるという、不都合な出来事を「見なかったことにしようとする空気（集合的否認）」という概念は、「空気による支配」を脱するうえで有効な手がかりとなる。この概念によって「見なかったことにしようとする空気」は明示されうる対象へと転じるため、「空気」の有する 5 つの性質のなかの「明示されない」という性質が失われるためである。「空気」を明示することができれば、「実は最近の災害での被災地はよくこのような空気になってしまうんです（そして将来的により大きな問題が生じてしまうんです）。この問題の対処方法についていっしょに考えてみませんか？」といった形で、問題を被災地の人々に内在するものとすることなく、まさに「問題の外在化」と同様のロジックによって問題の解決を図ることが可能になる。

もう 1 つだけ手がかりの例を挙げよう。Matsubara and Yamori（in press）は、愛知県在住者 750 名を対象とした調査を通じて、南海トラフ地震発生時における世間の空気感の変化を把握することを試みた。その結果、回答者の職業や準拠集団によって「空気」の読み方が異なることが明らかになった。この知見は、たとえば自身の属する職業集団において「空気」に基づく判断を行ったとき、他の職業集団からは、その判断が「空気」が読めていないものであるとみなされる可能性があるということを示している。すなわち、災害時における「空気」が絶対的なものではなく、職業や準拠集団によってまちまちであることが調査を通じて明らかになっている。この知見は、災害時には自身の読んでいる「空気」に支配されるのではなく、他者の視点を意識し確認しながら対処を行っていくことが必要であることを示している。そして、この知見を災害発生前に予め共有しておくことは、自集団の読んでいる「空気」を絶対視せず「空気」による支配から逃れていくうえで有効な手がかりとなる。

以上のように、「空気」による支配という問題に対処するためには、災害や危機が発生する事前の段階で「空気」による支配から脱するための手がかりを準備し、災害や危機が発生した際にも言説空間を豊かにすることができるようにしておくことが重要である。そしてこれが、本稿における「自粛警察」の分析から得られた示唆であると考えている[13]。

５．おわりに

本稿では、「自粛警察」という概念の使用が拡大する過程を関連するデータに基づいて分析し、行政の動きとツイート数の増加に関連がみられることや、「自粛警察」という概念が普及する以前に、既に「自粛警察」的な行為が存在していたことを明らかにした。また、従来から存在していた「不謹慎警察」や「不謹慎厨」といったインターネットスラングとの

対比を通じて、「自粛警察」という概念が新型コロナウイルス感染症の流行に伴う社会的状況の変化に即応した適切な意味を持ち、そのことによって一般に普及したと考えられることを論じた。さらに、「自粛警察」という適切な概念の存在が、自粛の「空気」を作り出す行為を対象化し、その行為やそれによって作り出される「空気」のコントロールを可能にしていくこと（問題の外在化を実現すること）につながったことを論じた。そして最後に、災害や危機における「空気による支配」に対処するための手がかりを事前に準備し、災害や危機が実際に発生した場合にも言説空間を豊かにできるようにしておくことの重要性を述べた。

なお、今回のデータ分析（特に twitter のデータ分析）は「自粛警察」という概念の使用の拡大を把握するための量的な分析が中心であり、ツイートの内容や当該概念が使用されている文脈等に関する質的な分析にはあまり踏み込んでいない。また、今回の分析は日本を対象としたものであり、「自粛警察」に類する行為の海外での発生状況や、比較社会学的な考察は行っていない。これらについては今後の課題としたい。

補注

(1) 「自粛警察」は、「不謹慎狩り」「コロナ自警団」「自粛自警団」「自粛ポリス」とも呼ばれるとされている（ウィキペディア, 2021）。本稿では、ウィキペディアの見出し語として採用されており、インターネットスラングに関する解説記事が豊富に存在するウェブサイトであるニコニコ大百科（ニコニコ大百科, 2021）やピクシブ百科事典（ピクシブ百科事典, 2021）においても見出し語として採用されている「自粛警察」という語句を、類語を代表した概念として考え、主たる分析対象とする。

(2) この調査は、インターネットを通じて18歳以上の1008名を対象に実施されたものである。また、自粛警察の行動に賛成するかという質問は、「飲食店営業再開に関する意識調査」の一環として実施されている。

(3) 人気度の動向とは、特定の地域と期間について、グラフ上の最高値を基準として「検索インタレスト」を相対的に表したもの。「検索インタレスト」とは、Google 検索で行われたすべての検索数に対してそのキーワードが占める割合のこと。地域は日本に設定。

(4) いわゆる「ネット炎上」の研究においては、同一人物が執拗に書き込みを繰り返すことによって、少人数の意見であっても多数の批判が殺到しているように見える場合がある（田中・山口, 2016）ことが知られている。本稿の分析において「自粛警察」を含むツイートを1件1件確認していったところ、ツイートの発信が少数のアカウントに集中している様子はみられなかった。したがって、ツイート件数の増大は、「自粛警察」という用語を使用する使用者数の増大と対応しているとみなしてよいと考えている。

(5) ツイート参照元は、https://twitter.com/no_minsu/status/1235161864406847488（最終参照日2021年9月21日）。

(6) ツイート参照元は、https://twitter.com/kadoya1/status/1247724474880819200（最終参照日2021年9月21日）。

(7) ツイート参照元は、 https://twitter.com/hiro/status/1252165802683363329（最終参照日2021年9月21日）。

(8) ツイート参照元は、 https://twitter.com/juggler_eiji/status/1252036685455474688（最終参照日2021年9月21日）。

(9) 第3節で述べた災害時の「不謹慎」の問題と関連させていえば、どちらもアンオフィシャルな社会規範が最終的に人々の行動に大きな影響を与えているという点が共通している。

(10) 規範逸脱者への嫌悪の理由としては、社会的ジレンマという概念を援用して考察することもできる。社会的ジレンマとは、個人にとっての合理的行動が社会全体にとっての最適性と矛盾する状態を指す概念である。新型コロナウイルス感染症の流行下における自粛は、社会全体で自粛を行ったほうが感染症の拡大は早期に抑制できるものの、個人にとっては、一人だけ抜け駆けして不自由な自粛を行わないほうが合理的（自分以外の全員が自粛を行っていれば感染拡大自体はほぼ抑止されるため）という構造にあると考えることができる。この観点からみると、規範逸脱者への嫌悪は、単に感情的な嫌悪というよりは、フリーライダーに対する「合理的な嫌悪」とでも言えるものと解釈することもできよう。

(11) なお、「自粛警察」という概念の誕生が、かえって「自分たちの行いが正義だと勘違いさせるのでは」という懸念も当初表明されていた（イザ！, 2020）。また、「自粛警察」という概念の存在によって人々が「自粛警察」の存在を意識し、自粛の「空気」が強まるといういわば負の側面も存在すると考えられる。しかしながら、結果的には「自粛警察」的な行為が減少し、本節で述べるように2021年4月ごろから自粛の「空気」が一枚岩でなくなってきた際にも「自粛警察」が再出現しなかったことから、本稿で論じた「自粛警察」という概念の存在による抑止力といった、いわば正の側面も同時に存在すると考えられる。

(12) 「自粛警察」的な行為が下火になっていった理由としては、様々な見解がみられる。たとえば、「振りかざした正義が批判された人たちは、多くの人の支持を得られ

なかったと自信を失い、同時に多様な価値観を学んで減っていった」といった見解や「休業要請に応じない事業者などへの罰則検討の影響」といった見解が存在する（時事ドットコム, 2021）。前者の見解は「自粛警察」という概念を用いて社会的な議論が行われたことの重要性を指摘しており、本稿と同様の見解であると考えている。後者の見解は、オフィシャルな社会規範をより明確化・徹底することによりアンオフィシャルな社会規範の生じる余地を少なくしようとする動きの影響について述べられたものと考えることができ、基本的にアンオフィシャルなものである「自粛警察」の活動の余地が少なることから、本文中では力点を置いて論じなかったものの「自粛警察」的な行為の減少には寄与したものと筆者も考えている。

(13) 「自粛警察」の問題に対して将来的にどのように対応すればよいかについて、本文で論じたもの以外には、大きく分けて2つの方向性が存在すると考えている。1つの方向は、政府の権限を強化し、自粛要請を外出禁止命令といった形に変更することである。ただし、この方向には、私権の制限という、扱いを熟慮すべき課題が存在する。もう1つの方向は、政府の権限は強化せず、自粛の自主性を徹底することである。例えば、「行政が外出自粛などを要請する際には、他人への攻撃は許されないという発信にも力を入れるべきだ」（日本経済新聞 電子版, 2020c）という提案がみられる。これは、自粛が本来自主的なものであり、自粛しないことが他者からの攻撃対象になってはならないということをオフィシャルな社会規範として明示することにより、「自粛警察」的な行為を抑止しようとするものである。ただし、「空気」の力を借りることができなくなるので、その分だけ感染拡大防止の実効力が低下する可能性も存在すると考えられる。

いずれにせよ、一旦感染が拡大してしまうと、ワクチン接種が進まない限りは人々の自粛や接触抑制といった問題に直面するのは不可避である。したがって、防災の観点からは、そもそもこのような問題に直面する状況に至ることを未然に防止することが最重要であると考えられる。そして、そのために何よりも重要なのは、感染が拡大するごく初期の段階における適切な対応である。とりわけ、政府の権限強化が許されるとするならば、島国の利点を活かした出入国管理の強化や入国者の行動制限についてではないだろうか。現に、本稿執筆時点の2021年5月中旬までの状況としては、台湾・オーストラリア・ニュージーランドといった島国では感染者数が相対的に少ないレベルに抑えられており、出入国管理が感染拡大防止において決定的に重要な役割を果たすことが示唆されている。その重要性を鑑みて、感染症の拡大防止のための出入国管理を別枠とし、そこに焦点を絞った形で政府の権限強化の議論を徹底的に実施するのが最もプラグマティック（実益に適う）ではないかと考えている。

参考文献

アサ芸プラス（2020）. YOSHIKI も暗に指摘？椎名林檎「東京事変」ライブに案の定噴出した痛烈批判, https://www.asagei.com/excerpt/144228 (2021-05-11)

朝日新聞（2020a）. 駐車場で県外車監視　遊技施設など約３０店　和歌山市　新型コロナ, 4 月 17 日朝刊（和歌山全県・１地方）

朝日新聞（2020b）.（戦後７５年　コロナ禍のもとで：下）「規範」圧力、戦時中と似る, 8 月 14 日朝刊（ちば首都圏・１地方）

朝日新聞（2021）. ネオンの街、疲れてしまって ミナミ・歌舞伎町を歩く 重点措置, 4 月 20 日夕刊

朝日新聞デジタル（2020a）. 「来県お断り」徳島県　双眼鏡で県外ナンバーをチェック, https://www.asahi.com/articles/ASN4Q76Z2N4PPTLC00B.html (2021-05-14)

朝日新聞デジタル（2020b）. 75 年前の「自粛警察」　私はパーマの女性に石を投げた, https://www.asahi.com/articles/ASN8C5VSXN8BUCVL005.html (2021-05-10)

藤和彦（2020）. コロナ「自粛警察＝歪んだ正義」批判で隠れる本質…自己犠牲を厭わない真面目な人ほど陥る, https://www.rieti.go.jp/jp/papers/contribution/fuji-kazuhiko/160.html (2021-05-10)

福島申二（2021）.（日曜に想う）私の中の「マスク風紀委員」, 朝日新聞 2 月 21 日朝刊

Gergen, K.J. (1999). *An Invitation to Social Construction*. London: Sage Publications.
（ガーゲン, K.J. 東村知子（訳）（2004）. あなたへの社会構成主義　ナカニシヤ出版）

阪神タイガース（2020）. 藤浪晋太郎選手、長坂拳弥選手、伊藤隼太選手の新型コロナウイルス陽性判定について, https://hanshintigers.jp/news/topics/info_6802.html (2021-05-26)

北海道（2020）. 緊急事態宣言【２月２８日発表】, http://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/kth/kak/kinnkyuuzitaisengennsetumei0228.pdf (2021-05-14)

ハフポスト（2021）. 新型コロナ、厳罰化がまた彼らを呼び覚ます。「自粛警察」再来のシナリオ, https://www.huffingtonpost.jp/entry/satoru-

ishido_jp_600548eec5b697df1a07188b (2021-05-19)
イザ！（2020）．「自粛警察」はヒーロー？　アニメ系ネットスラングが変化か、一部で誤解も, https://www.iza.ne.jp/kiji/life/news/200508/lif20050813180019-n1.html (2021-05-18)
時事ドットコム（2021）．「自粛警察」なぜ消えた？ 専門家、罰則導入で再燃懸念―緊急事態宣言, https://www.jiji.com/jc/article?k=2021011900099 (2021-05-10)
株式会社 Wizleap（2020）．飲食店営業再開についての意識調査を発表！, https://hoken-room.jp/money-life/9113 (2021-05-19)
K-1 実行委員会（2020）. 3 月 22 日(日)さいたまスーパーアリーナ「K'FESTA.3」に関するお知らせ, https://www.k-1.co.jp/news/32049/ (2021-05-26)
厚生労働省（2020）．イベントの開催に関する国民の皆様へのメッセージ, https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/newpage_00002.html (2021-05-11)
京都新聞（2021）．路上の集団飲酒、府や市の職員が見回り　「楽しいことだが、今は控えて」, https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/554647 (2021-05-11)
ライブドアニュース（2020）．「緊急事態宣言出ているのに営業」腹立てドア破壊したとして男逮捕, https://news.livedoor.com/article/detail/18094375/ (2021-05-14)
Matsubara, Y., and Yamori, K. (in press). Survey on post-disaster timelines following a large-scale disaster expected to occur in the near future for pre-disaster recovery planning, *Journal of Integrated Disaster Risk Management*.
三浦麻子・鳥海不二夫・小森政嗣・松村真宏・平石界（2016）. ソーシャルメディアにおける災害情報の伝播と感情：東日本大震災に際する事例 人工知能学会論文誌, 31(1), NFC-A_1-9.
宮本匠（2016）．減災学がめざすもの 矢守克也・宮本匠（編）現場でつくる減災学 新曜社（pp.165-188）
宮本匠（2019）．人口減少社会の災害復興の課題：集合的否認と両論併記 災害と共生, 3(1), 11-20.
宮本匠（2020）．災害復興の「空気」の研究――グループ・ダイナミックスの視点から 復興, 8(4), 9-12.
元吉忠寛（2021）．新型コロナウイルス感染症による人々への心理的影響 社会安全学研究, 11, 97-108.
内閣府（2020）．新型コロナウイルス感染症緊急経済対策～国民の命と生活を守り抜き、経済再生へ～, https://www5.cao.go.jp/keizai1/keizaitaisaku/keizaitaisaku.html (2021-09-21)
ねとらぼ（2018）．ねっと用語知ったかぶり うわ、来ちゃったよ……　ネットにはびこる指摘したがり「〇〇警察」とは, https://nlab.itmedia.co.jp/nl/articles/1801/08/news009.html (2021-05-10)
NHK（2020a）．「３連休 大阪府～兵庫県の往来自粛を」大阪府知事 呼びかけ, https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200319/k10012340171000.html (2021-05-14)
NHK（2020b）．神奈川県 県警が外出自粛の周知に協力, https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200409/k10012378841000.html (2021-05-14)
NHK（2020c）．東京 新宿 歌舞伎町で外出自粛呼びかけ 外国語でも 警視庁, https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200411/k10012381421000.html (2021-05-14)
NHK（2020d）．神奈川 鎌倉 海岸沿いの道路など渋滞 訪問控えるよう呼びかけ, https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200419/k10012395551000.html (2021-05-14)
NHK（2020e）．相次ぐ「自粛警察」 どうすれば, https://www.nhk.or.jp/shutoken/net/20200520.html (2021-05-14)
NHK（2020f）．「自粛警察」相次ぐ 社会の分断防ぐ冷静な対応を 新型コロナ, https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200509/k10012423651000.html (2021-05-14)
ニコニコ大百科（2021）．自粛警察, https://dic.nicovideo.jp/a/%E8%87%AA%E7%B2%9B%E8%AD%A6%E5%AF%9F (2021-05-19)
日刊サイゾー（2020）．神田うの、国民の不安をよそにスキー満喫の無神経さに批判殺到「どんだけめでたい人？」, https://www.cyzo.com/2020/02/post_232791_entry.html (2021-05-11)
日本経済新聞 電子版（2020a）．志村けんさん死去　新型コロナ感染で肺炎, https://www.nikkei.com/article/DGXMZO57387450Q0A330C2CC0000/ (2021-05-26)
日本経済新聞 電子版（2020b）．大阪府、パチンコ 6 店公表　休業要請応じず　全国初, https://www.nikkei.com/article/DGXMZO58445240U0A420C2AC1000/ (2021-05-14)
日本経済新聞 電子版（2020c）．自粛警察を生む「正義

感」 行政の発信に工夫を 太田肇・同志社大教授, https://www.nikkei.com/article/DGXMZO61027170R00C20A7CR8000/ (2021-05-18)

西日本新聞ニュース（2020）．「マスクせずにせき」乗客が非常通報　福岡・地下鉄車内でトラブルに, https://www.nishinippon.co.jp/item/n/585602/ (2021-05-11).

岡山県（2020a）．２０２０年４月２４日知事記者会見, https://www.pref.okayama.jp/site/chijikaiken/660976.html (2021-05-14)

岡山県（2020b）．２０２０年４月２８日知事記者会見, https://www.pref.okayama.jp/site/chijikaiken/661950.html (2021-05-14)

大澤真幸（2018）．山本七平『「空気」の研究』 100 分 de 名著「メディアと私たち」 NHK 出版, 87-126.

ピクシブ百科事典（2021）．自粛警察, https://dic.pixiv.net/a/%E8%87%AA%E7%B2%9B%E8%AD%A6%E5%AF%9F (2021-05-19)

産経ニュース（2020a）．東京事変が公演中止　新型コロナで, https://www.sankei.com/entertainments/news/200304/ent2003040007-n1.html (2021-05-11)

産経ニュース（2020b）．京産大に脅迫・殺害予告の電話やメール　新型コロナ集団感染で, https://www.sankei.com/west/news/200407/wst2004070025-n1.html (2021-05-14)

三省堂（2020）．「今年の新語 2020」の選評 3. コロナで全国区「〇〇警察」, https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/shingo/2020/best10/Preference03.html (2021-05-10)

新型コロナウイルス感染症対策本部（2020a）．新型コロナウイルス感染症対策本部（第 15 回） 議事概要, https://www.kantei.go.jp/jp/singi/novel_coronavirus/th_siryou/gaiyou_r020227.pdf (2021-09-21)

新型コロナウイルス感染症対策本部（2020b）．新型コロナウイルス感染症対策本部（第 19 回） 議事概要, https://www.kantei.go.jp/jp/singi/novel_coronavirus/th_siryou/gaiyou_r020310.pdf (2021-09-21)

新型コロナウイルス感染症対策本部（2020c）．新型コロナウイルス感染症対策本部（第 27 回） 議事概要, https://www.kantei.go.jp/jp/singi/novel_coronavirus/th_siryou/gaiyou_r020407.pdf (2021-09-21)

新型コロナウイルス感染症対策本部（2020d）．新型コロナウイルス感染症対策本部（第 29 回） 議事概要, https://www.kantei.go.jp/jp/singi/novel_coronavirus/th_siryou/gaiyou_r020416.pdf (2021-09-21)

杉万俊夫（2013）．グループ・ダイナミックス入門――組織と地域を変える実践学 世界思想社

スポーツ報知（2020）．宝塚歌劇が再開、入り口で消毒に赤外線検温…コロナ渦中で賛否分かれる, https://hochi.news/articles/20200310-OHT1T50034.html (2021-05-14)

週刊文春（2020）．茂木外相 安倍会見当日にゴルフしていた, https://bunshun.jp/denshiban/articles/b72 (2021-05-14)

田中辰雄・山口真一（2016）．ネット炎上の研究 勁草書房

TBS ニュース（2020a）．東京都、巡回で“外出自粛”直接呼びかけへ, https://news.tbs.co.jp/newseye/tbs_newseye3949212.html (2021-02-21)

TBS ニュース（2020b）．“コロナ関連”の１１０番、約４００件に, https://news.tbs.co.jp/newseye/tbs_newseye3952005.html (2021-02-21)

徳島県（2020）．令和 2 年 4 月 24 日 臨時記者会見 フルテキスト版, https://www.pref.tokushima.lg.jp/governor/press-record/5036998/ (2021-05-14)

東京新聞（2020）．＜新型コロナ＞忍び寄る「自粛警察」 飲食店に匿名嫌がらせ, https://www.tokyo-np.co.jp/article/16958 (2021-05-14)

東京都（2020a）．小池知事「知事の部屋」／記者会見（令和 2 年 3 月 25 日）, https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/governor/governor/kishakaiken/2020/03/25.html (2021-05-14)

東京都（2020b）．小池知事「知事の部屋」／記者会見（令和 2 年 3 月 30 日）, https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/governor/governor/kishakaiken/2020/03/30.html (2021-05-14).

東京都（2020c）．小池知事「知事の部屋」／記者会見（令和 2 年 4 月 23 日）, https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/governor/governor/kishakaiken/2020/04/23.html (2021-05-14).

東京都（2021）．リバウンド防止期間における東京都の対応（令和 3 年 3 月 24 日発表）, https://www.bousai.metro.tokyo.lg.jp/1009757/1013290.html (2021-05-19).

辻田真佐憲（2018）．空気の検閲――大日本帝国の表現規制―― 光文社

ウィキペディア（2020）．「自粛警察」の変更履歴,

https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E8%87%AA%E7%B2%9B%E8%AD%A6%E5%AF%9F&dir=prev&action=history (2021-05-10)
ウィキペディア（2021）. 自粛警察, https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%87%AA%E7%B2%9B%E8%AD%A6%E5%AF%9F (2021-05-19)
山本七平（1983）. 「空気」の研究 文芸春秋
山中茂樹（2005）. 震災とメディア 世界思想社
矢守克也（2001）. 社会的表象としての「活断層」 実験社会心理学研究, 41(1), 1-15.
吉田道雄（2001）. 人間理解のグループ・ダイナミックス ナカニシヤ出版